

『新春特別企画・第2回“エルプ”コンサート』

不滅の名盤！カラヤンのスッペ序曲集、 ミュンシュ・パリ管のブラームス第1番を聴く

日時：2010年1月23日（第4土曜日）

場所：竜ヶ崎ショッピングセンター「リブラ竜ヶ崎」2階旧映画館

プログラム：①スッペ：序曲集（軽騎兵、ウィーンの朝・昼・晩、詩人と農夫、他）

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮 ヘルツォーグハーモニ管弦楽団(1969年録音)

②ブラームス：交響曲第1番ハ短調

シャル・ミュンシュ指揮 ハリ音楽院管弦楽団(1967年録音)

講師：中山 実（エルプ再生・研究家）

入場料：無料

*エルプ（レーザーによるLPレコード再生プレーヤーの名称。今回はレーザーによる再生音を、ほとんど劣化のないハードディスクで聴いていただく予定です。）

カラヤンはポピュラーな名曲、通俗小品にも決して手を抜くことなく、オーケストラの技量や機能を総動員して、緻密から壮大までの魅力を最大に発揮した演奏を行った。そのお陰でどれほど多くの人がクラシック音楽のファンになったことだろう（！）。六九年に録音されたこのスッペ序曲集も、力の入った演奏である。《軽騎兵》の冒頭のトランペットのファンファーレの勢いのよさ、ハンガリーの民族舞曲の深い思入れ、軽快なギャロップなどに、カラヤンに指揮された時にだけベルリン・フィルが聴かせる「これでもかー」といった気迫と美が結晶している。《ウィーンの朝・昼・晩》《詩人と農夫》などすべてが個別の魅力を発散する。
 佐々木節

スッペ：序曲集

【①軽騎兵②ウィーンの朝、昼、晩③スピードの女王
④美しきガラテア⑤怪盗
⑥詩人と農夫】

ヘルベルト・フォン・カラヤン

指揮ベルリンpo

録音：1969年9月ベルリン

初出：1973年8月 MG2395

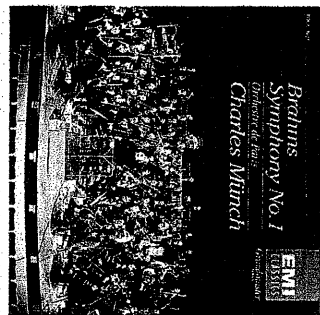
グラモフォン◎POCG2124



ブラームスの交響曲の中で唯一ベートーヴェンに近い音のドラマを持つこの曲の演奏には、抑えられた息のみよりも動機、劇的な迫力なによりも響かれる。それは本来フルトウエントナーの仕事なのだ。幾分ながら理窟的な口は使われていない。そこで息を吐くのがエントナー／バリ管なのだ。この響で物足りない点があるとすれば録音が最新ではない、ということだ。演奏自体はおどろくべき見事なものである。たとえばマナーのピアノマックスな起伏と激奏はこれ以上を望めないだろう。マナーは絶えずものない、楽器の響度が増へ、軽快さ。これはトクダシなからマナーのしるへ、最も羨望なクラフ

マックスを築き上げるのだ。#0に比べてなくはならない
 第一楽章も情熱と音の厚みがある、マナーの響きとしてスケールが大きく、マナーの響きとしてマナーの全土ホルキーだぞききまれている。主部の冒険は非常に面白い。ホで開始されるが機軸員在であり、空を舞うマナーや音が出る。冒険の割合はマナーマナーの指揮者がマナーの本を無つているので、きわめてマナー色が濃く、中間の二楽章も同様で、少しもマナーなに臨まなマナーマナーのたおやかさがマナーマナーでもの響く響くを生かしている。それだけに第三楽章ではマナーの響が祀られてくるが……。

＜中絶＞



ブラームス：交響曲第1番ハ短調作品68
 シャル・ミュンシュ指揮、VPO